

朝の蟬

能村 研三

国語という名前

私が住んでいる市川市では、市内の小中学校に新教科「言語探究科」を設置し、国語と英語、総合的な学習の時間を横断的に結び、言語運用能力を体系的に育てるとして、この9月から試行、来年4月から本格導入を見込んでいると言う。この構想は、主体的に学ぶ力を育てることを重点としており、「言語探究科」はその主要施策として位置付けられたものだそうだ。

先日、先師登四郎の著作権の関係から筑摩書房から「言語文化」という教科書が送られてきた。そこには「韻文の表現」の項に「詩歌を作る」の章で

春ひとり槍投げて槍に歩み寄る

の句が、高浜虚子、石田波郷の句に並んで掲載されていた。

この教科書の正式な表題は「ちくま言語文化」と大きく書かれていて、本の右隅に小さな活字で「高等学校

青嶺へと心孤高に風さやぐ
尿るたび命減りけり朝の蟬
凜々と血の若くなる荒神輿
板敷に置かれし軍手敗戦忌

線状に篠突く雨や盆の入り

大粒の喜雨がまさかのレベル4

送り火や羽音のしたる闇の中

なまじつか水打ち地べた燃えたたす

木移りする蛇するすると影を曳く

色あせぬことに疲れて水中花

国語科用」と書かれていた。

この「言語文化」という表題は、前出の「国語と英語、総合的な学習の時間を横断的に結び、言語運用能力を体系的に育てる」ことに狙いがあるように思われる。

グローバル化が叫ばれる中、もちろん英語力に力を入れることは、全く否定するものではないが、「国語」という名前が後退することで、その重要性が薄まることには違和感がある。

考える、感じる、理解する、表現する。こういった人間の活動を支えているのは国語力だと言われている。「国語力をつけることが、学力全般の向上につながる」と言われている。

先師登四郎や林翔先生も国語教師であったが、この「言語文化」という言葉をどのように思われるのだろうか。

能村 研三